

武器型石製模造品

京都 個人蔵

京都国立博物館に寄託されている多くの考古資料のなかに、いくつかの古墳時代の石製模造品がある。このうち、かつて資料の紹介がおこなわれたが、その実態が明らかでない短甲・盾などの武器類があり、それに関連する資料について報告する。

現在、収納されている石製模造品の武器類は、短甲三点・盾七点である。このうち、短甲一点と盾二点は、大正八年、高橋健自氏によって栃木県宇都宮市に存在する『雷電山古墳』の出土遺物として報告されているものが含まれている。^{注1} 同遺物は栃木県史にも同報告をうけて報告されている。^{注2}

出土古墳の明らかな資料は三点であるが、他の資料もその形態及び製作技法など、いくつかに共通点が認められることや、先述の報告書で紹介されている雷電山古墳出土の短甲のうち一点が、現在、天理参考館に収蔵されていることなどからみて、早い時期に資料が分散していることがうかがえるし、当館に収納されているこれらの資料が、かつて同一場所からの出土品である可能性も予想される点できわめて重要な資料である。以下各資料について略述する。

短甲型石製模造品(図1・2、挿図1)

短甲はすべて黒灰色を呈した硬質の滑石製で、型的には同様のものである。

1 (図1の1、挿図1の1)

他の二例と異なって、表面の整形が良くおこなわれている。大きさは、後胴の高さ八・一糎、前胴の高さ三・九糎、裾の径六・〇糎、裾の前後の径四・四糎、胴左右の径五・〇糎、押付板に相当する部分の左右の幅六・三糎、覆輪部の幅〇・五糎を測る。前胴の引合板は幅〇・五糎の沈線で表現する。成形は縦方向にこまかく削りでおこなっており、その上をさらにこまかい削り調整で整形する。雷電山古墳の出土品である。

2 (図1の2、挿図1の2)

大きさは、後胴の高さ七・五糎、前胴の高さ三・八糎、裾の左右の径五・六糎、裾の前後の径三・六糎、胴左右の径四・六糎、同じく前後の径三・二糎、押付板部の幅五・四糎、覆輪の幅〇・六糎を測る。引合板は幅〇・七糎の幅広い沈線で表現する。胴部は左右及び前後がくびれ、鉄製の短甲に近い形である。押付板部の左端部が一部欠損する。成形は縦方向に削りでおこない、さらにこまかい削りを加えて整形する。底部は荒い削りのみである。後胴に鉄が付着した痕跡を残す。出土地は明らかでない。

3 (図2の1、挿図1の3)

後胴の高さ八・六糎、前胴の高さ五・七糎、裾の左右径六糎、同前後の径四・一糎、胴部の左右径五・一糎、同前後の径三・七糎、押付板部の幅六・二糎、覆輪の幅〇・五糎を測る。胴前面の引合板部は幅〇・五糎の沈線で表現する。後胴の上部中央に、後面から径〇・二糎の小穴を穿つ。この短甲は、全体につくりが荒く、上部か

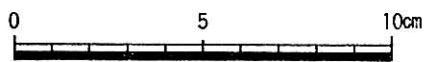
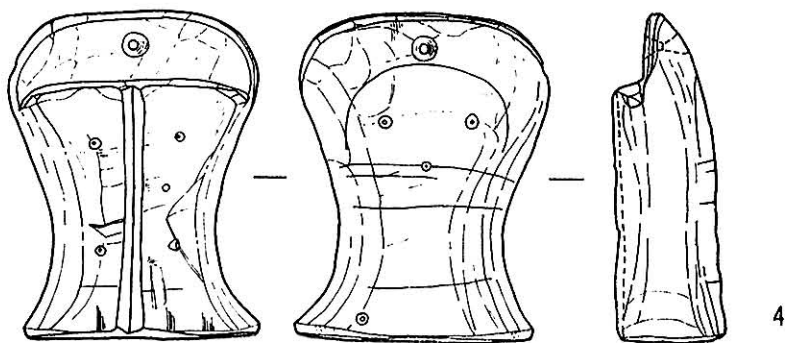
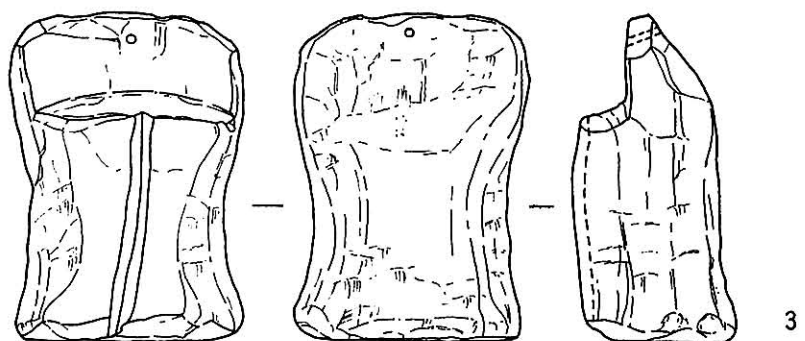
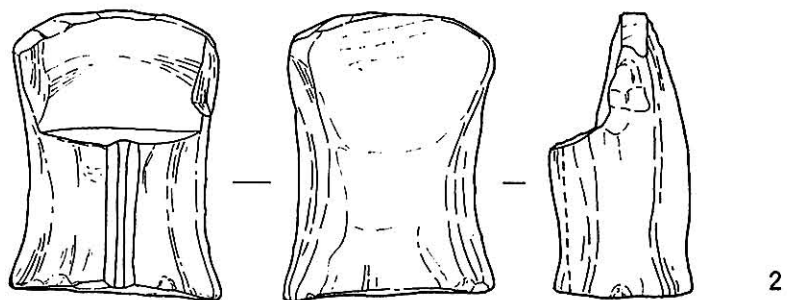
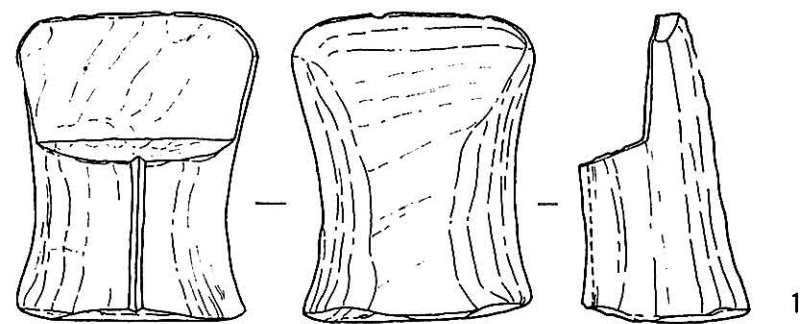


插图 1 短甲型石製模造品実測図

ら長さ一糎から〇・五糎幅の成形のための削りが著しい。こまかい調整の加わっているのは後胴下半部で、上部は自然面をそのまま残す。前胴は未調整で、引合板も斜方向に走り雑な仕上げとなっている。後胴は押付板部のところで大きく曲っており、同内側も内くぼみの曲面となる点が前の二例と異なっている。底部には長径二糎、短径二糎、深さ〇・三糎の浅い凹みが施されている。底部の整形も荒い。

天理参考館に收藏されている短甲(図2の2、挿図1の4)は、全体に丸みをおびた精緻なつくりできわめて写実的である。大きさは、後胴の高さ八・六糎、前胴の高さ六・三糎、裾の径六・三糎、同前後の幅二・六糎、胴の左右の径四・二糎、前後の径二・五糎、押付板の幅六・六糎を測る。引合板は沈線であらわす。本短甲は、他の例にはみられない鉄板の組合せ状況を沈線で表現している。後背では、押付板を最上部に曲線で示し、その下部に横矧板を示す横線が四本描かれている。横矧板と押付板の間には円形の小さな凹みが、逆三角形にあげられているが、この部分が三角板で組合わされたことを意識していると考えられるし、小凹みも鎮留を示したものである。小さな凹は裾に一ヶ所存在する。前胴は裾部に一線の沈線があるのみである。中央の引合板の左右には左側に三ヶ所、右側に二ヶ所の小さな凹みを表現する。押付板の中央に前後からあげられた紐穴がある。雷電山古墳の出土品である。

短甲の調整に関しては、すべて研ぎなどの磨きを加えておらず、削りによる調整である。

盾型石製模造品(図3、挿図2・3)

七点の盾のうち、雷電山古墳出土品は二点ある。大きさはさまざまであるが、盾の上部の形からみて三つに類型化できる。

第一類は盾の上部が弧状となり側面に続く端部が捺形となるもの。第二類は上面がゆるく弧状となるもの、第三類は上面が強い弧状を呈する小形のものである。三類とも材質は滑石を用いている。石材の硬度は高いが色調にそれぞれ若干の差異をもっている。

第一類(挿図3の図1・2・3)に属する三例のうち、1は雷電山古墳出土品である。側面等に一部欠損があるがほぼ全形が明らかである。褐色を呈し硬い滑石である。表面は上下及び左右ともゆるやかな曲面をなし、裏面中央下半に把手がつけられる。大きさは全高一七・二糎、上部の幅八・八糎、下端幅八・五糎、中央部が狭く八糎を測る。厚さは中央部が一・〇糎ともっとも厚く、各側部は〇・五糎内外である。把手は左右から孔があげられる。表裏とも削りで成形するか、表面はさらに細かい削を施したのち磨きを加える。側面は磨きによって整形する。

2は1と同様の形態である。大きさは、全高一五・〇糎、上部の幅七・三糎、下端幅七・六糎、中央部の幅七・一糎を測る。厚さは中央部が最も厚く〇・九糎で周辺端部では〇・七糎となる。裏面中央に下端で長さ三・七糎、幅一・四糎の台形状の把手を削り出しており、左右から径〇・四糎の孔が両側から穿たれる。表面の整形は丸のみで縦方向に削る。のみ幅は幅一糎、長さ二糎前後である。裏面は、上半部が斜方向に幅〇・五糎内外と細長く削る。下半部は表面の整形と同様である。上端部は稜にそって面取りを加える。側面は幅〇・二糎ほどの細かい縦方向の削りで仕上げを行なう。

3は全高一・三糎、上部幅六・二糎、下端幅六・八糎、中央部

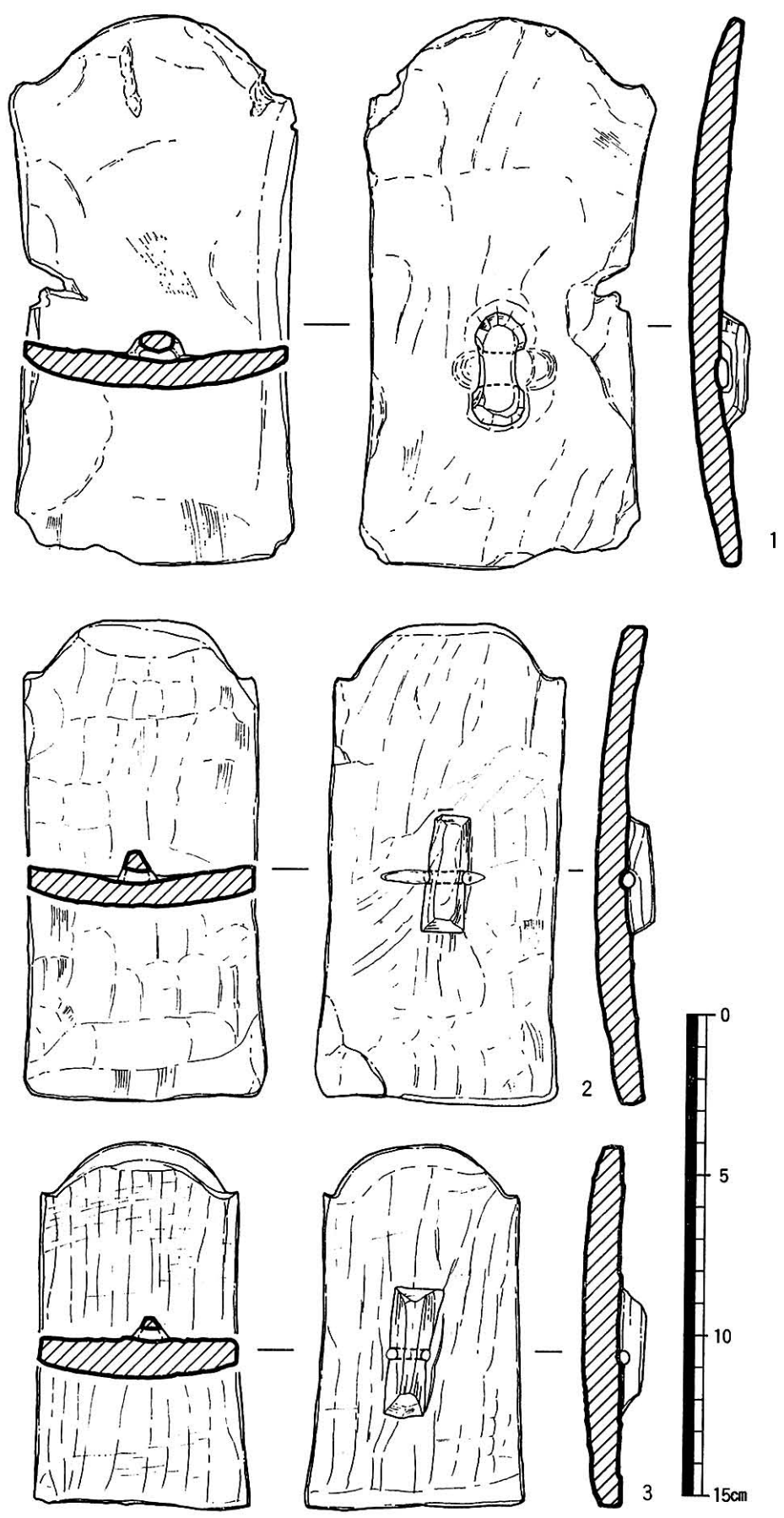


插图 2 盾型石製模造品実測図

幅六・二種とやや小形である。厚さは最も厚い中央で一・二種、側面で〇・六種を測る。裏面中央に底部で長さ四・一種、幅一・四種の台形状の把手を削り出し、両側から〇・三種の孔を穿つ。成形は表裏とも縦方向に幅〇・五種内外と細長い削りを加える。前二者とは若干整形方法が異なる。側面はこまかく縦方向に削りを加える。表面の最上部の稜部に磨きを加え面取りを施す。褐色を呈する硬質の滑石である。鉄分が付着する。

第二類(挿図3の1)は、上部がゆるやかな孤状を呈し、下端の幅が最も狭くなる型である。大きさは全高一三・八種、上部幅七・七種、下端幅七・二種を測る。表面は曲面をなすが裏面は平担となる。厚みは最も厚い中央部で一・八種、左右の端部で〇・七種、上下の端部で一種となる。裏面中央に長径七・三種、短径三・一、高さ〇・二種の方形の台を削り出し、その上に長さ四種、幅一・三種の把手を造り出す。把手の両側から紐孔を穿つ。表面の成形は削りを基本とするか、さらにその上を磨いて整形する。表面は横方向に、幅〇・五種をのみによって削りをおこなう。側面は斜め方向の磨きによって整形する。表面上端の稜部に磨きによる面取りがある。褐色を呈する硬質の滑石である。

第三類(挿図3の2・3・4)

2は電雷山古墳の出土である。表面の上下が強く曲面をもつが、左右はフラットとなる。大きさは全高一・二種、上部幅五・一種、下端幅五・三種、中央部で四・八種を測る。厚さは最も厚い中央部で一・二種、両側では〇・八種で、上端では〇・五種、下端で、〇・八種となる。裏面中央やや下部に基底部で長径二・九種、短径一・六種の台形の把手を削り出し、両側から径〇・三種の紐孔を穿

つ。成形は全面削りでおこなうが、表面は斜め方向に磨きを加え、その擦痕が著しい。裏面は上部及び下部の一部に磨きによる整形を加えるが把手部の両側はのみによる削りのみである。墨色を呈する表面上部に墨書がある。

3は縦長で表裏とも平扁な板状の形態である。全高は九・九種、上部幅四種、下端幅四・四種を測る。裏面の中央に基底部の大きさが長径三種、短径一・二種の台形の把手を削り出し、両側から、径〇・三種の紐孔を穿つ点は他の例と同様である。表面の形成は削りを基本とし、さらに磨きによって整形する。裏面は縦方向の削りを主体とするが、一部横方向の削りで整形し、一部下端は磨きを加えている。側面の仕上げは磨きでおこなう。黒色の滑石である。裏面上部に墨書がある。

4は細かい調整を加えない小形のもので、表面はわずかな曲面をなす。全高七・六種、上部の幅四・五種、下端幅四・三種、中央部幅四・二種を測る。表面は中央部には長径三種、短径一・四種の台形の把手がつき、両側から径〇・六種の紐孔を穿つ。整形は荒く、表面は削りの上を面取り状に磨きを加えるが、裏面はのみによる荒い削りのままである。側面は磨きを加えられている。黒色を呈する。なお、裏面上部に後世書き加えられた「十」の墨書がある。

以上、短甲型石製品及び盾型石製品の概要を記したが、両者とも最近の出土例がほとんどなく、わずかに短甲型石製模造品が群馬県安中市築瀬にある二子塚古墳から一例したというにすぎない。^{注3}この一例のほかは古い時代に発見されたものが大部分で、高橋健自氏の調査にある如く、盾型石製模造品が栃木県雷電山古墳の出土例

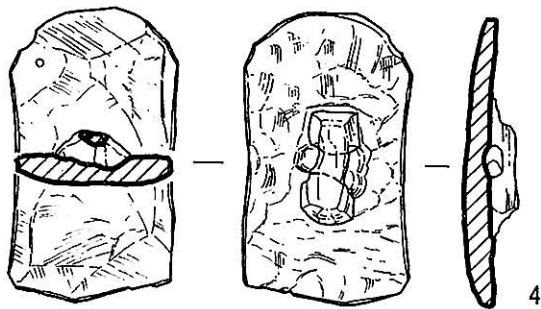
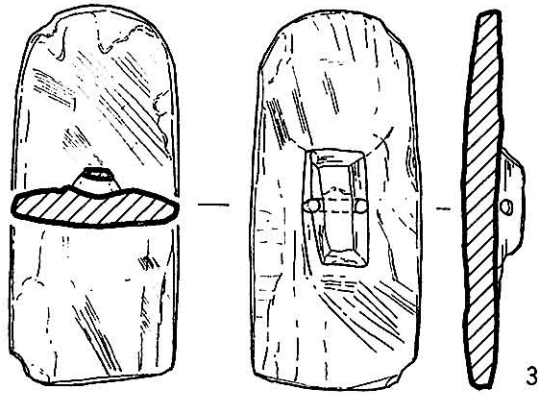
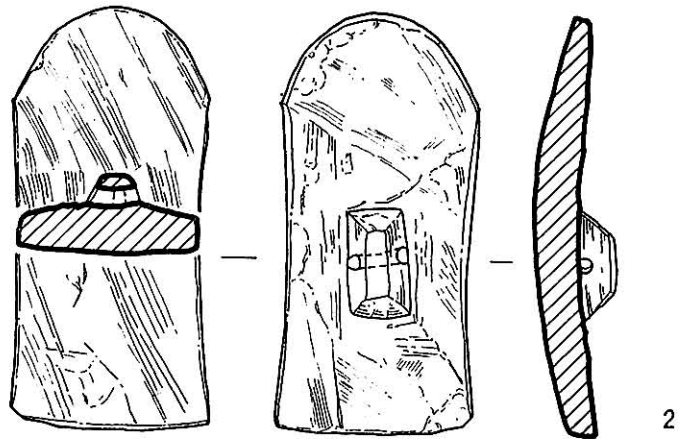
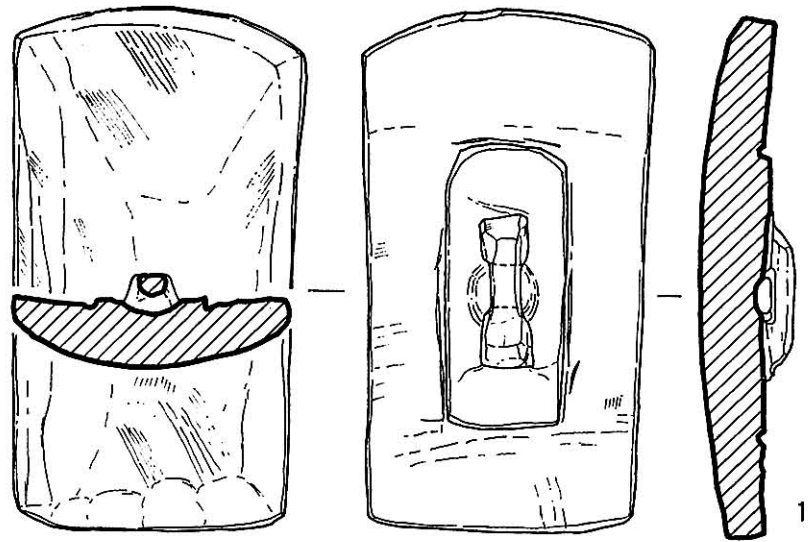


插图 3 盾型石製模造品実測図

(第二類)と、奈良県出土と伝えるものや群馬県出土の一例などごくわずかである。奈良県出土の盾は、表面に鋸歯文を四段にわたって線刻し、盾を立てるための支えが同時につくり出している特異な形態を示す。

短甲及び盾型の石製品がまとまって出土したことで著名な雷電山古墳は、栃木県宇都宮市江曾島(旧栃木県河内郡横川村江曾島)にある大型の前方後円墳である。現在、ほとんど原形が矢なわわれているが、周辺に遺存する前方部・後円部・同壕の一部などから復元すると、全長三〇メートルに及ぶ墳形をもつ可能性もあるという^{注4}。この古墳の封土は、江戸時代末期・明治時代初期及び大正三年頃と昭和四〇年頃の四度にわたって土取りがおこなわれた。先述の武器型石製模造品などは、他の斧・鎌・刀子・鏡・剣・有孔円板などとともに大正一〇年頃出土したという。武器型石製模造品は、先述の如く短甲二点と盾三点が出土しているが、うち盾一点は本図に収録できていない。

雷電山古墳の立地する地域は下野の中心部で、笹塚古墳、塚山古墳など大形の前方後円墳の集中するところである^{注5}。弥生時代から集落遺跡が立地し、古墳時代の集落跡も多く、出土遺物のなかには刀子・鏡などの石製模造品もしばしば検出されるようである。雷電山古墳は、この地域では最も大きな古墳で、時代も五世紀後葉頃と推定され得よう。

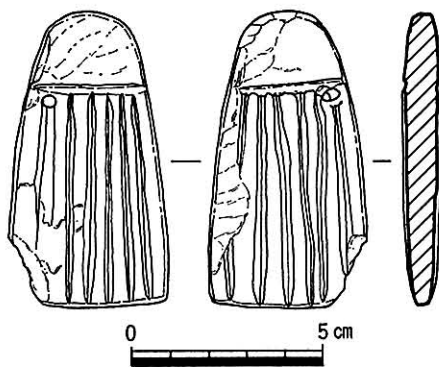
先述の武器型石製模造品のうち、雷電山古墳出土と知れるもの以外は現在全く出土地が明らかでない。墨書等の記されている点を考慮すると、他のものも同古墳の出土品かと想定されるが定かでない。いずれにしても、雷電山古墳以外にも武器型の模造品が存在し

た古墳があったことを予想せしめる。

こうした特異な武器が他の剣・刀子・斧等と同時に出土した例がなく、椽・箴・膝・腰掛などの機織具を含んだ模造品を出した唯一の古墳である群馬県、稲荷山古墳とともに特異な例として考え得ることができよう。

楯型石製模造品(図7・挿図4)

これらの武器型石製模造品とは別に、一例の楯型石製模造品を報告しておく。この楯型石製模造品は、先の高橋健自氏の論文^{注6}に簡単な測図が記載されたものと同じのものである。福島県(岩代国)安達郡本宮町付近発掘と伝えているもので、黄褐色の滑石製の楯である。楯歯の一部が欠損するが、全長七・八糎、歯の長さ五・七糎、歯の端部の幅四・三糎、頭部と歯部の境いの部分で五・二糎、厚みは中央部で一・〇五糎を測る。歯を表裏とも七本づつ歯間を溝状に削って表現する。楯歯の上部隅に斜め方向に小孔を穿つ。全面を磨



挿図4 楯型石製模造品実測図

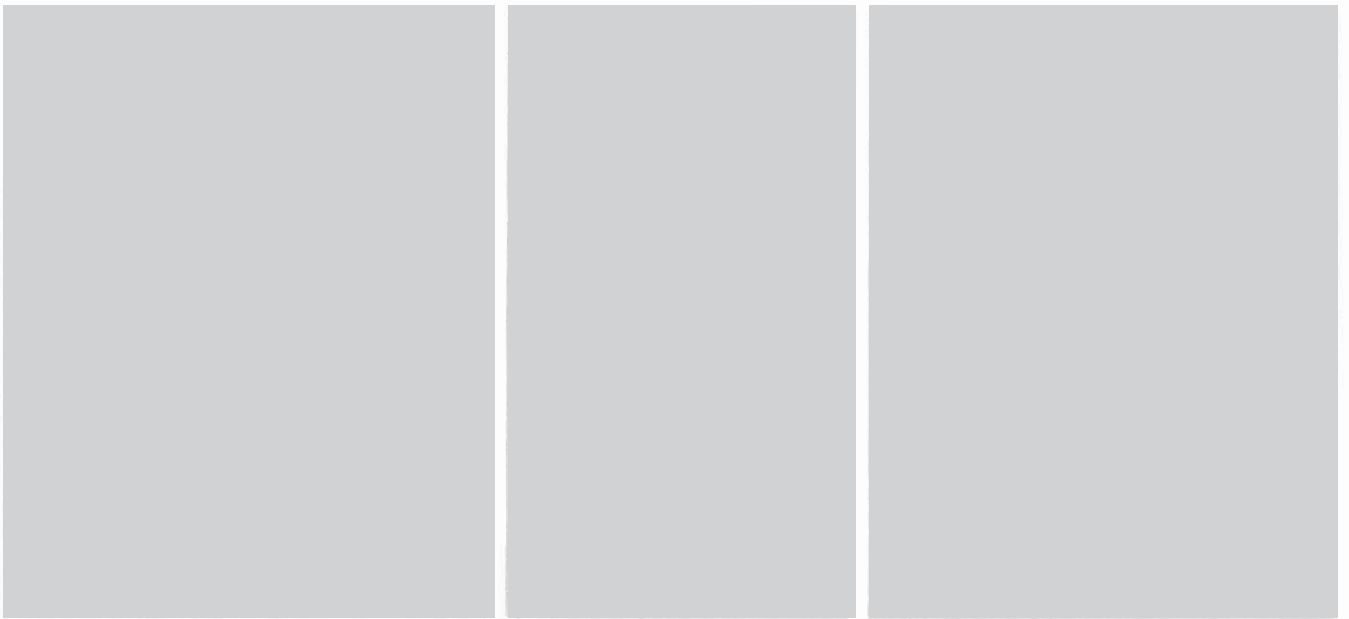
きによって整形する。断面形はやや丸みをおびる。

櫛型石製模造品の例は本例が唯一の資料であろう。器形的には古墳時代前半期の副葬品にみられる竹製の竪櫛を忠実に写しとったものである。

(八賀 晋)

〈注〉

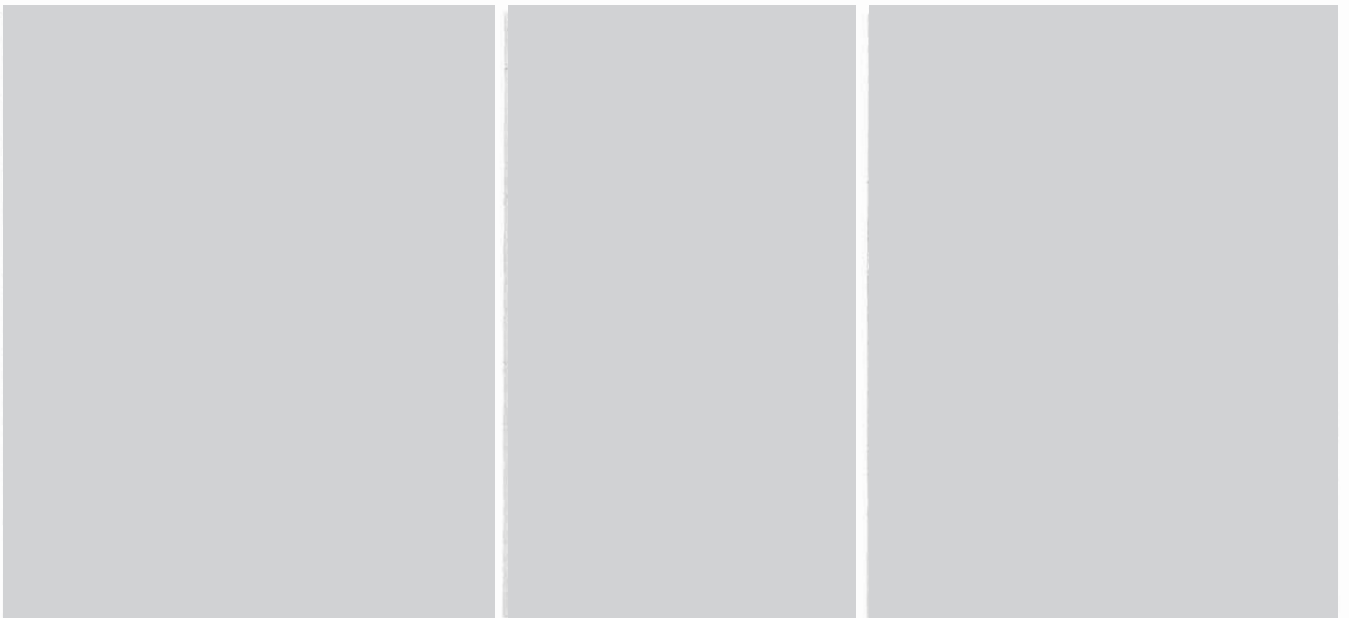
- 1 高橋健自『古墳発見「石製模造器具の研究」帝室博物館学報 第一冊、大正八年。
- 2 田代善吉『栃木県史』第二巻考古編 昭和十四年。
- 3 群馬県立歴史博物館梅沢重昭氏の教示による(安中市史に所収)。二子塚古墳『考古学年報』一〇、日本考古学協会昭和三二年。
- 4 宇都宮市教育委員会 木村光男氏の教示による。
- 5 宇都宮市史第一巻 原始古代編(昭和五四年三月)
- 6 高橋健自前掲書図版第二五図



1 正 面

側 面

背 面

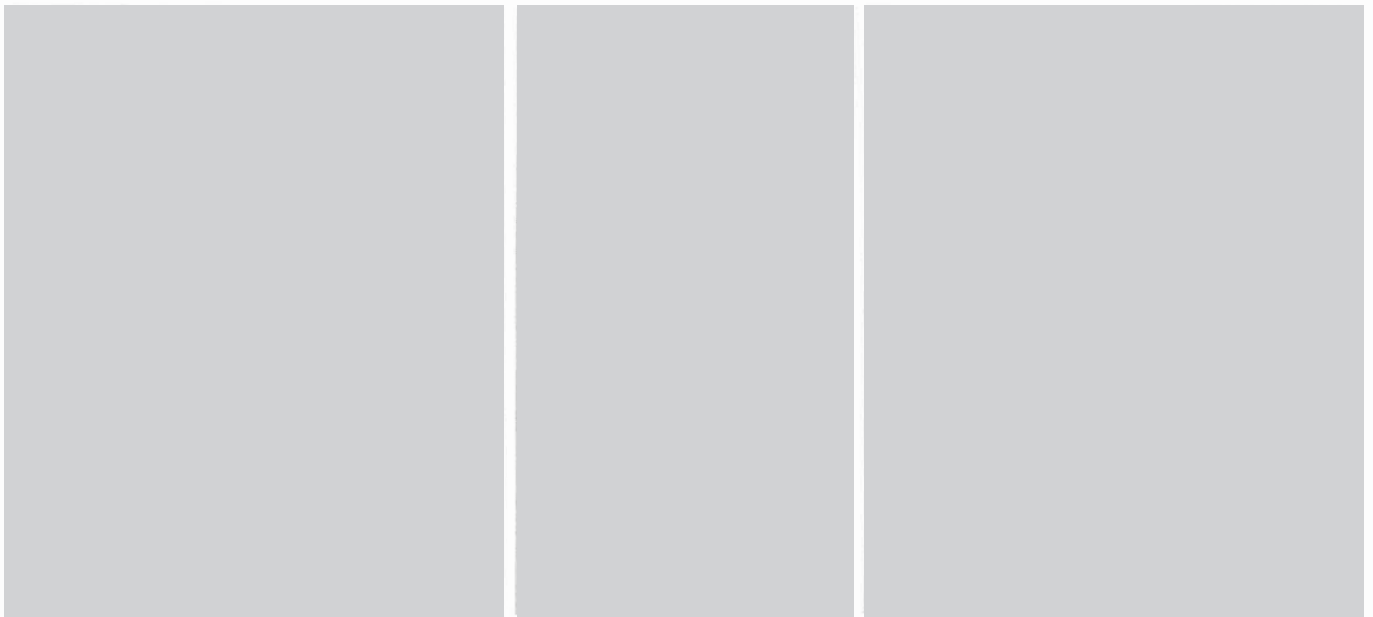


2 正 面

側 面

背 面

图 1 短甲型石製模造品 京都 個人蔵

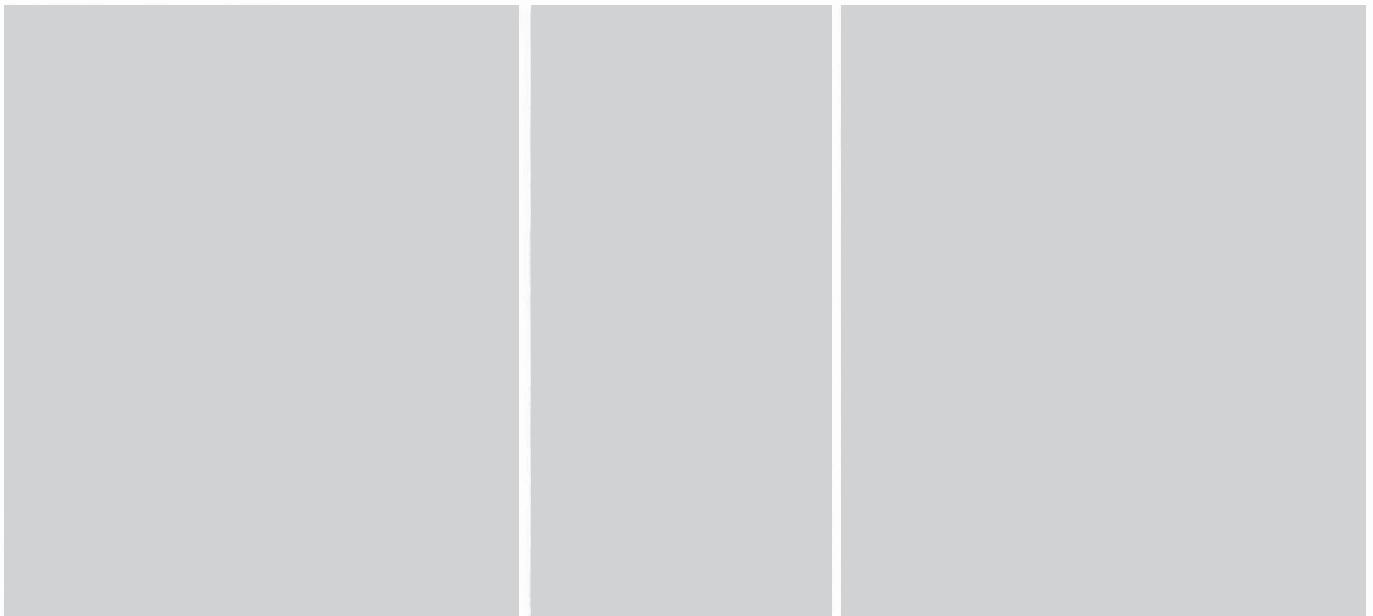


1

正 面

側 面

背 面



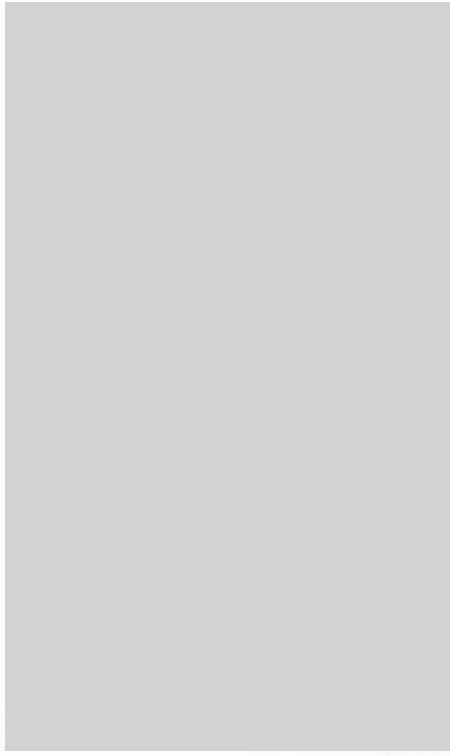
2

正 面

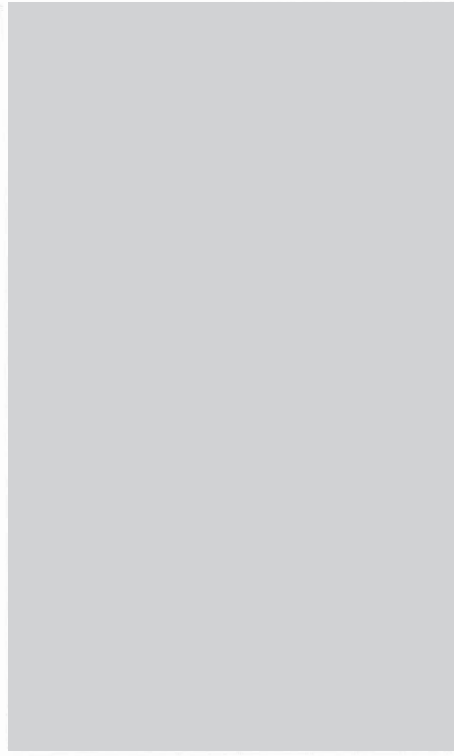
側 面

背 面

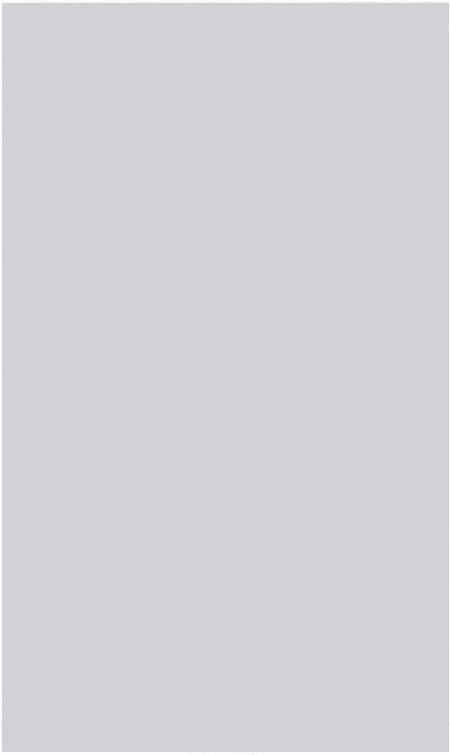
图 2 短甲型石製模造品 京都 個人蔵



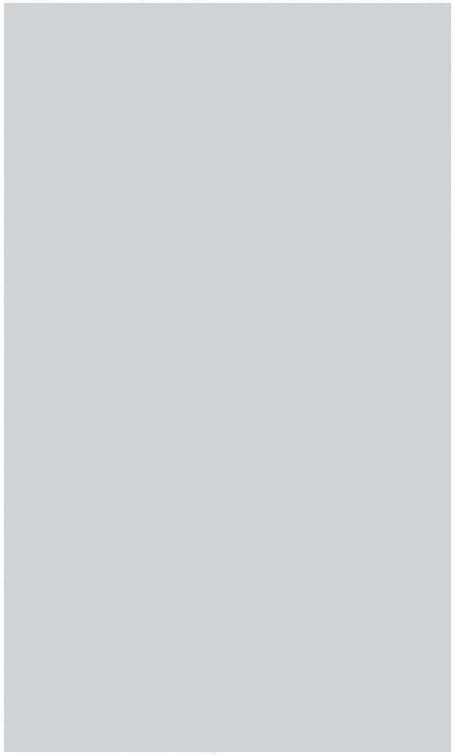
1 正 面



背 面



2 正 面



背 面

图 3 盾型石製模造品 京都 個人蔵

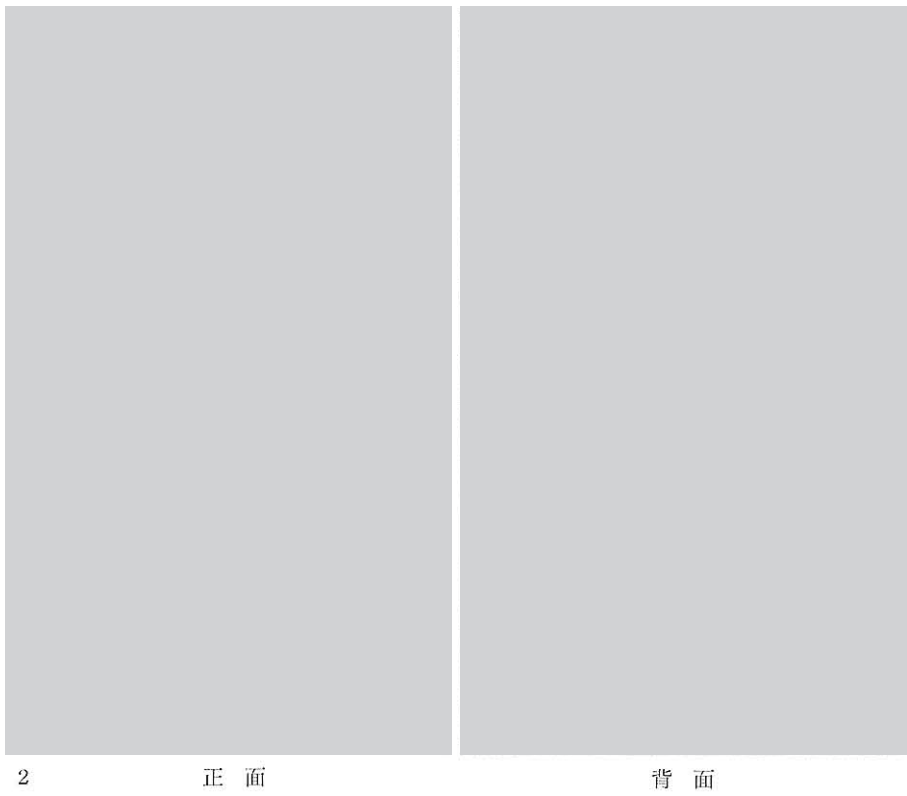
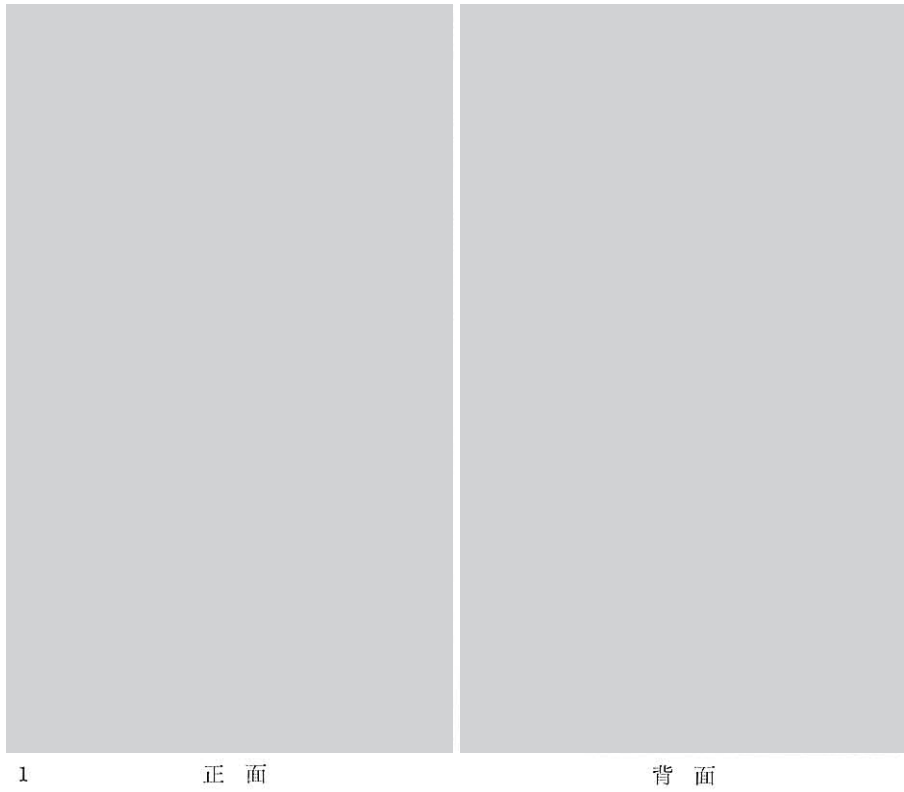
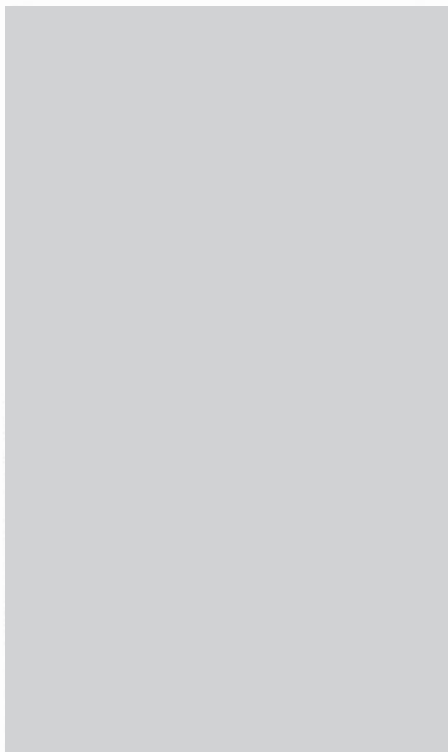
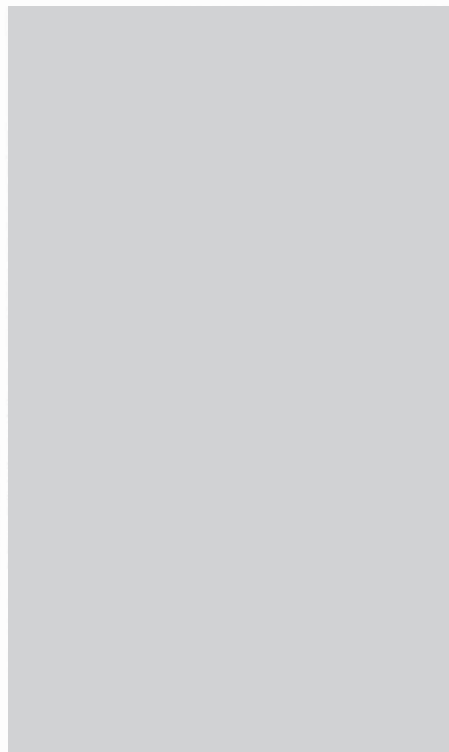


图 4 盾型石製模造品 京都 個人藏

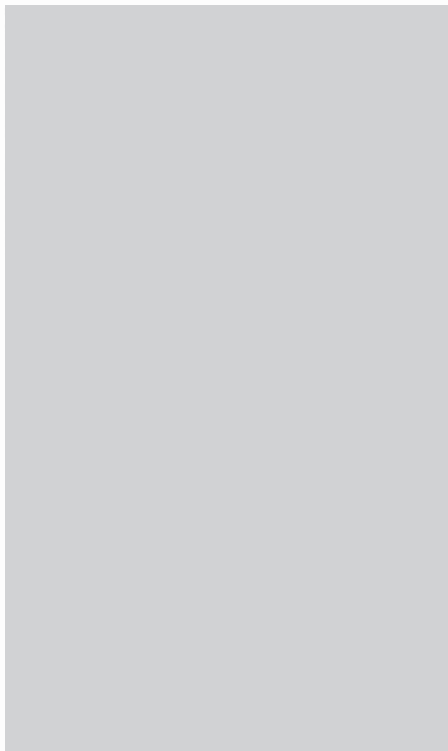


1

正 面

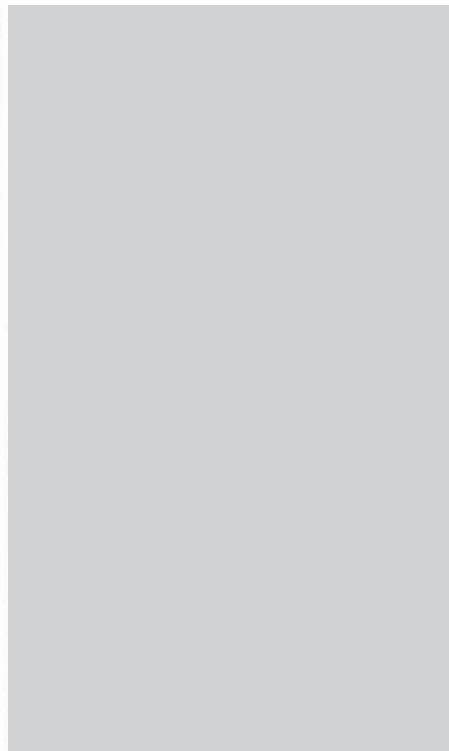


背 面



2

正 面



背 面

图 5 盾型石製模造品 京都 個人藏

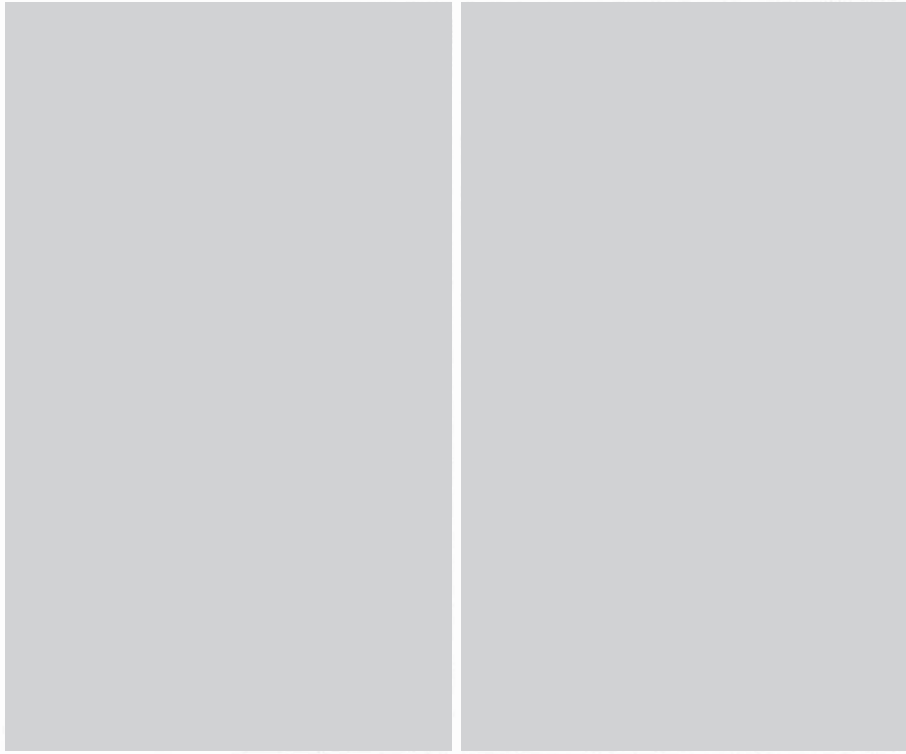


图6 盾型石製模造品 京都 個人蔵

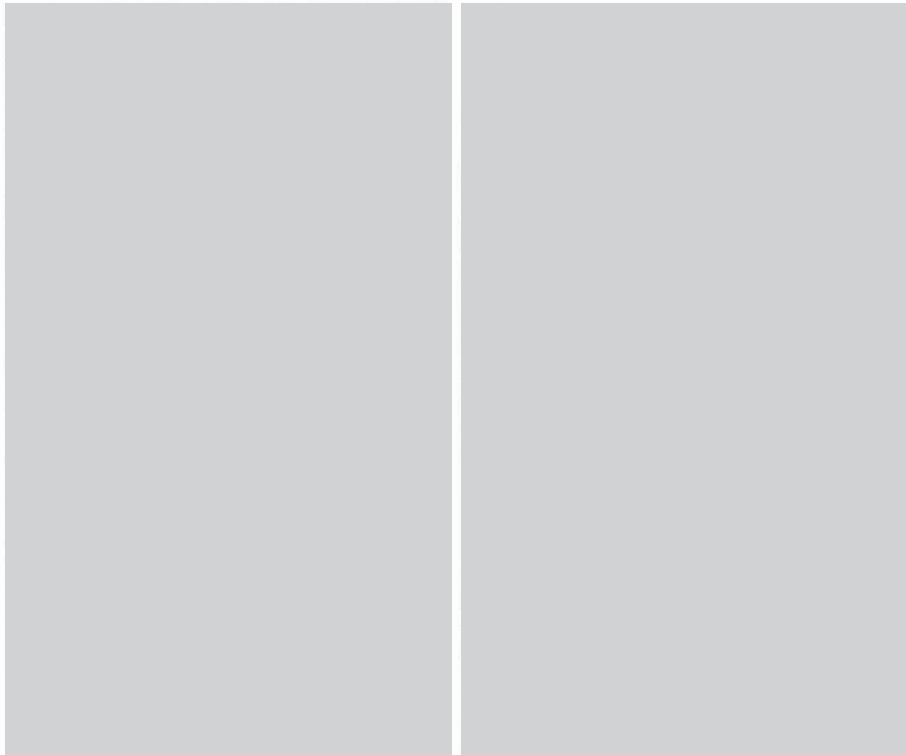


图7 櫛型石製模造品 京都 個人蔵